

**目的** 昨年度の本研究第6報に続き、江戸時代中、後期の家相の文献を通して当時の人々の住まいに対する考え方を探る。家相は、特に江戸時代後半に江戸や上方の大都市を中心に盛んになり、その内容も複雑になる。ここでは、方位による禁忌の思想という観点に立つことにより、この時代に流行した家相の実態を明らかにする。

**方法** 東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の家相文献のうち、寛政10年(1798)刊行の『家相図解』、文化元年(1804)(序文)の『家相図解全書』、天保11年(1840)刊行の『家相秘伝集』、安政7年(1860)刊行の『落地準則』の4冊を中心に、敷地の選定方法、居宅や倉などの配置、間取りなどに関する吉凶判断の例を文中より抽出し分析することにより、方位と禁忌の思想が住まい造りに果たした役割について考察する。又、上記4冊の家相文献の内容の比較検討を通して、住まい観の変遷について考察する。

**結論** 江戸時代中・後期の家相文献の中には、暦との関連性や間取りのみにこだわるものも多く見られるが、上記の4文献は、敷地、建物、室内各々の吉凶について方位とのかかわりを中心に論じるという形式をとっている。吉凶判断の根拠は、陰陽五行説によるものが多く、方位に関しては、東西南北の四方よりも乾坤巽艮の四隅を、また、南北軸よりも艮-坤(鬼門-裏鬼門)軸が重要視される。江戸時代中・後期における「家相」は、日常生活の中で方位を意識し、自らの住まいの置かれる空間的な位置や、住まいの中における自らの位置を把握し、その状態をより良くするための、住まい手自らの努力を促すための指標と捉えることができる。